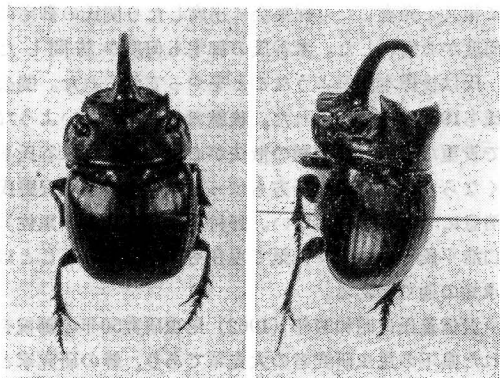


## ダイコクコガネは何処へ行く 車兵

高 橋 寿 郎



ダイコクコガネ ♂ 神崎郡大山産  
23—IX—1952

この虫は兵庫県下には早くからいることが知られている。すなわち、明治8年(1875年)有名な G. Lewis が日本で採集した標本に基づいて C. O. Waterhouse がロンドン昆虫学会々報上に日本産コガネムシに関する論文を発表された時、兵庫(当時の兵庫といっていた所は湊川——いまの新開地本通り——から柳原の間の海岸地帯で、神戸と言われていた所はいまの生田区にあたる。ともに現在の神戸市内のことである)を記録されたのが初めてであり、多くいると記録されている。今手許に明治2年兵庫港地図並びに明治31年の神戸市の地図があるので眺めて見ると、当時はほとんど農村地帯らしい状況であるからウシなども多くいたことだろうし、この虫も多かったと考えられる。この虫は牛糞の中及び牛糞の下の土中に穴を掘って牛糞を其処へつめ込み、それに卵を生みつけるという変わった生活をしている。糞を食べて大きくなるのである。その後、明治34年(1901)に大上宇一氏が揖保郡から記録されている。戦前の舞子は人家も余りなくまだまだ農村地帯であった。ここに亡くなられた古川博二先生がおられ、その近所に級友福永安郎氏宅があり、同宅の電灯に飛来したといつてこのダイコクコガネをもってきて貰ったことがある。古川先生も採集しておられるとのことを聞いた。余談ではあるが、その付近には何度か採集に出掛けた。秋にはキタテハが大変多くいたことと土の中からオサムシモドキを多く採集したことを今でも想い出す。当時はまだ、この付近に本種はいたのであろう。しかし、神戸市内では可成り採集した

が、当時もういなくなっていたようである(ウシやウマはまだ市内では見受けられたが——)。

そして戦後の荒廃から復興へ、まず住宅をということでもどどん自然破壊が無秩序におこなわれると同時にこの虫の姿も海岸線沿いからは姿を消してしまった。昭和25年頃長崎大学の和田義人博士がまだ学生時代で私の家によく遊びに来られ、“生野にダイコクコガネがたくさんいますよ”と教えて下さった。早速採集に出掛けた。生野から姫路よりに戻った神崎郡大山の牧場にこのダイコクコガネが非常に多くいた。しかし、此処は何時の間にか同好者の知る所となり、特に大阪あたりの人が無茶苦茶に採集するようになった。この牧場も現在無くなってしまったので、まだこの辺にはいると思われるが、最近では採集されたというニュースを聞かない。戦前伯耆大山で電灯に飛来したのを採集したので氷の山でも随分探して見たのであるが、どうしても見つからなかった(もっともこの種は8月下旬~9月上旬が一番多いので、その時期に行っていないので採れなかったのかも知れない。山口福男氏は鉢高原で採集しておられるとのこと故その辺にはいると考えられる)。氷上郡、出石郡下には数が多いかどうか知らないが、いることは間違いない。山本義丸氏から同地産の標本をいただいている。

“兵庫の自然”(のじぎく文庫)の中で沢田敏郎、岡本清、猪股涼一氏により多可郡三国岳山麓に本種がいることを発表しておられる(昭和35年)。私も早速行って見た。所が今や農村は機械化時代、牛馬を飼っている所はほとんどない。地元の人にたずねてもウシはいないとのこと、そこではとうとう採集出来ずに帰った。だが同じ多可郡下の千ガ峯山麓三谷牧場にいることを岡本清氏から教えられ調査に行ってみた。なるほど乳牛の放牧場であるが(奥谷先生によると和牛の糞の方がダイコクコガネは好きなようであると)数は多いとはいえないが、このようにこの虫も開発とともに次第にその住家を追われ、機械化による牛馬の数の減少はその食べ物が無くなるということで棲息場所がせばめられている。

近畿地方ではほとんど産することが知られていない珍しいこの虫が兵庫県下にはまだ数が少くともいるということは大切にしたいものであり、いなくなってしまうことは大変淋しいことである。